魔法研究所 中年所員イ・コージの日々　※ザコ≧勇者 番外編

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法研究所　中年所員イ・コージの日々　　※ザコ≧勇者　番外編

【Ｎコード】
Ｎ５１３２Ｙ

【作者名】
くま太郎

【あらすじ】
ルーンランド魔法研究所の所員イ・コージは独身・彼女なしの３８才。
今日も無茶な依頼に振り回されて羽目に。
※この作品は作者が書いているザコ≧勇者　ザコにはザコの闘い方のスピンオフ作品です

イ・コージの日々（前書き）

ネタキャラから幕間主人公へ、そしてとうとうイ・コージはオリジナル小説の主人公になりました

イ・コージの日々

魔法王国ルーンランド
剣と魔法の世界オーディヌスで魔法に重きをおく国。
当然、魔法の研究には、かなりの力を入れている。
その中心はルーンランド魔法研究所、幾重物の魔法結界に保護された3階立ての建物は、広大な敷地に建っていた。

そして魔法研究所に1人の男が出社して来る。
ぽっちゃり体型に短い黒髪に黒縁眼鏡、お世辞にも美男子とは言えないの容姿を持つ男の名前はイ・コージ。
38才独身彼女なし、ちなみに研究所には、つい最近スカウトされたばかりである。

前は違う国の魔法研究所で働いていたが、人にはあまり言えない理由で退職をした後にルーンランドの魔法研究所にスカウトをされたのだ。

中途採用とスポンサーのない哀しさかイ・コージにあてがわれている研究室は決して広くはない。

イ・コージは人より早く出社して研究室を掃除した後に研究室で朝飯を食べる。
朝食と言っても前の日に買ったパンとお茶だけの侘びしい物。
一人暮らしの侘びしい部屋で侘びしい食事をする位なら実験道具に囲まれて食べた方が、侘びしさも薄れるし時間短縮にも繋がるからである。
あらかた食事を食べ終えたイ・コージに1人の女性が声を掛けてき

た。

「またー研究室で食事ですかー？いいですけども栄養にも気を使って下さいよー」

彼女の名前はリア・クローゼ、イ・コージの助手である。
年は二十歳と言うがボサボサの髪を紐で結わえ、でかい眼鏡をかけて化粧もしていないから、それが本当かはどうかは見た目では分からない。

「リアさんおはようございます。栄養は昼にとりますから、それで今日は新しい課題は届いていませんか？」

イ・コージの様な新参者が好きな研究を出来る訳がなく貴族や商人からの依頼をこなしていくしかない。

「来てますよー。今回は騎士団から研がなくていい剣を作って欲しいそうですー。お坊ちゃま達は武器の手入れより髪や服の手入れが大切なんですよねー」

リアが言っているのは決して悪口ではなく、魔法王国のルーンランドにおいて騎士を目指す貴族は少なく才能ある者は宮廷魔術師やルーンランドが誇る魔術師隊を目指す。
従って騎士団は自然とお飾り的な物に落ちぶれていた。
口の悪い国民から言わせるとお花畑騎士団、頭の中がお花畑で、見た目の美しさにこだわり手間も懸かる所がお花畑と言われる由縁だ。

「これ以上剣に新しい魔法を付与するのは、きついですね」

少し前に騎士団からの依頼で剣に軽量化や熱撃の魔法等を付与したばかりである。
一時的な魔法と違いイ・コージに求めれるのは半恒久的な魔法効果。場合によっては剣に触媒を埋め込んだり魔法文様を刻み込む必要がある。
従って過度の魔法付与は剣の耐久度を著しく下げかねない。

（泊まりですね…）

イ・コージはとある事情で貴族嫌いになっていたが、ルーンランドに来てからの無茶振りの連続でさらに貴族嫌いに拍車がかかった気がする。

ｓｉｄｅ　リア・クローゼ

（イ・コージさんも、こんな無駄な依頼断ればいいのに）

お花畑騎士団に便利な装備を与えても精々貴族が集うパーティで自慢するしかないのだから。
もっとも全く無駄だと言う訳ではなく、イ・コージの技術を利用した品を魔法研究所では販売をしており、その利益は研究所だけでなくルーンランドの国庫も潤していた。
実際にイ・コージがルーンランドに来て最初に手掛けたマジックアイティム”ゴブリンバイバイ”はゴブリンの被害を激減させただけではなく、今や重要な輸出品の１つとなっているのだから。
つまり今回の装備も有用ならルーンランドにおいて、実質的に直接攻撃をになっている傭兵隊に格安でまわされる事になる。

（さてイ・コージさんは今回どんな魔法を使ってくれるんでしょうねー）

恋よりオシャレより魔法に興味があるリアにしてみれば次々に新しい工夫を見せてもらえるイ・コージの研究室は理想の職場であった。

ｓｉｄｅ　イ・コージ

哀しいかな。弱小研究所、イ・コージは１つの仕事だけに関わっている事ができないでいる。
研究室には騎士団や傭兵隊から依頼されている装備品が魔法付与待ち状態にされていた。

「イ・コージさん、新しい依頼は上手くいきそうですか？」

「所長おはようございます。とりあえず構想はありますので、定時の仕事が終わり次第取りかかりますよ」

イ・コージに話し掛けてきたのは魔法研究所の所長ヤ・ツーレ。
イ・コージは、これほど名を体で表している人間を見た事はない。
細すぎる体に薄くなった髪は、正にやつれた感じがしているし、年は４０を少し越えた位な筈であるが、そのやつれ感からか下手をしたら老人にも見えたりする。

「すいません。我が研究所で一番の功績がある魔術師に報いる事が出来なくて」

そう言うとヤ・ツーレは薄くなった頭をイ・コージに下げてきた。

「止めて下さい。所長が誘ってくれなかったら自分は、この世にすらいないんですから、それに有名になんてなりたくないですし」

（相変わらず油断がならないお人だ。下手に急かせないで、こっちが自主的に徹夜する様に仕向けるんだから）

事実ヤ・ツーレは権謀術数に長けており自分の悲哀たっぷりな容姿さえ平気で武器にしてしまう。
忙しい所長がわざわざ自分の所に、来た所をみると、今回の依頼はそれなりに急ぐ物らしい。

「とりあえず来月にお城で開かれるダンスパーティーにまで形してくれたらいいですから」

つまり、騎士団のお坊ちゃま達は剣の手入れに掛ける時間をダンスパーティーの準備に費やしたいらしい。

（恩ある所長の髪の為にも頑張るとしますか）

決意を新たに装備品に魔法を付与していくイ・コージであった。

イ・コージの日々（後書き）

2作同時連載を頑張ります

イ・コージの望み（前書き）

１日でお気に入り登録が４０を越えていました
イ・コージ最初はネタキャラだったのに感謝です

イ・コージの望み

ｓｉｄｅ　イ・コージ

真夜中の研究室で中年の男が机の上に置かれた物をジッと見つめていた。

これしかないですよね。
依頼からは些か離れていますけども、使い勝手とかを考えると、これが一番ですよね…。

（明日リアさんの反応を見てから決めますか）

イ・コージは冷たい床に寝転がってぽっちゃりした体を毛布で包むと眠りについた。

ｓｉｄｅ　リア

それを見た時にリアは頭を抱えたくなった。
一応は尊敬をしている上司が研究室の床で寝ていたからである。

（この人は私がいなきゃ研究室に住み着ちゃうんじゃないかな？）

自分も同い年の女の子に比べたら自己に対する関心が薄いほうではあるけども、この上司にはもう少し自分自身を労る気持ちを持って欲しいと思う。

そんな事より、今私がしなきゃいけないのは

「イ・コージさん起きて下さいー。風邪ひいちゃいますよー」

「ふぇ、あっリアさんおはようございます」

流石のイ・コージさんでも熟睡は出来なかったらしく、どこか眠たそうだ。

「こんな生活をしていたら体を壊しちゃいますよー」

「ははっ、誰かに心配をしてもらえるなんて久しぶりですね」

それ位でそんなに嬉しそうに笑わなくてもいいのに

「そりゃ同じ職場の人が床で寝ていたら心配しますよー」

「デュクセンに居た頃に研究室で寝ていたら心配より先に研究結果を盗む同僚ばかりでしたから、リアさんそれよりこれを見て下さい」

イ・コージさんが差し出したのは、何の変哲もないフェルト布。

「フェルト布ですよね。これがどうかしましたかー？」

「よく見て下さい」

そう言われてフェルト布を良く見ると布と同じ色の糸で刺繍が施してあった。

「これは魔法陣ですか？」

それにイ・コージさんが刺繍したの？

真夜中の研究室で1人で？

「羊毛に圧力の魔法を掛けてフェルト布を作り、魔力を通わせた絹糸にサビ除去と研磨の魔法陣を刺繍してあります。これを鞘の内部に張り付けるに予定です」

剣を抜く度に剣が磨かれる訳ですか。

でも

「騎士団の中には鞘に宝石とかをはめ込んでいるお馬鹿さんもいますよー？それをバラして内側に張り付けるのは難しくないですかー？」

「そんな人には従者さんに直接拭いてもらうしかありませんね。でも軽く拭くだけで剣が輝きますから騎士団の人は自分で磨きたがるかと」

私も試しに預かっている剣をフェルト布で軽く拭いてみたら、手入れがあまりされていなかった剣が直ぐに輝きを取り戻したんです。確かにこれなら見栄っ張りの多い騎士団に受けると思いますー。

「汚れたら交換ですかー。洗ったら駄目なんですか？」

「洗うと刺繍が崩れちゃうんですよ。それに貴族の皆様なら買い換えてくれるじゃないですか。軽い魔力があれば誰でも縫えますから雇用にも繋がりますよ」

「随分と気を使いますねー」

イ・コージさんは使い勝手だけでなく製造方法まで考えるなんて。

「私の名前が出なくても責任は取らされますからね。出来る事はしておきたいんですよ。」

それで功績と利益は研究所の物なんですよねー

「でもこれだと真似されちゃうじゃないですかー？」

「大丈夫ですよ。最後の防刃の魔法は研究所で付与しますから」

手抜かりはなしですか。

結果、フェルト布は騎士団や傭兵隊に大好評になりました。

中には鎧や兜まで磨く人も出て来て、ルーンランドでは汚れ１つない装備をしてる者をフェミニストと呼ぶ様になった程ですから。

ｓｉｄｅ　イ・コージ

なぜか所長のヤ・ツーレさんから呼び出しをされました。

何か苦情が来たんでしょうか？

まさかの退職勧告じゃないですよね？

「失礼致します。イ・コージです」

幸い所長室は穏やかな雰囲気です。

でも穏やかな雰囲気からの退職や訓告も良くある話。

「イ・コージさん良く来てくれました。フェルト布の評判とても良

いですよ」

良かった、悪い事ではなさそうです。

「それなら幸いです。それで何の御用でしょうか」

「そんなに緊張しないで下さい。イ・コージさんの評価が高まったから何かプレゼントを贈りたいと思いましてね。例えば君好みの美しい助手でも構いませんよ」

美しい助手が来た所で何もないですから、それはいりません。

「それなら欲しいモノがあるんですが……」

ｓｉｄｅ　リア

「研究室の引っ越しですかー？」

「ここは手狭ですからね。こないだのフェルト布のご褒美として広めの研究室をお願いしたんですよ」

イ・コージさんは嬉しそうに話しているけども、ゴブリンバイバイや今回のフェルト布の売り上げを考えると何とも慎ましい願いなんですけど

「それで良いんですかー？自分好みの女の人を助者として囲っている人もいますよー」

「何を言ってるんですか？そんな事をしたら目立つでしょ、それに

私にはそんな度量も器量もありませんから」
確かにイ・コージさんの立場を考えると目立つのを避けたいのは分かりますけど、そんな情けない事を堂々と言わないでも
ーーーーーーーーーーーーー
新しい研究室を見ての感想は１つ。
（イ・コージさんは研究所に住み込むつもりですね）
だって個室にベットもあるしキッチンまであるんですから
「ここいいでしょ。ここなら安心してグッスリと眠れます」
そうですよね。
ここはルーンランドの心臓部ですから他国の人間が無断で入るのは、ほぼ不可能ですもんねー。
イ・コージさんは見つかる心配がなくりますもんね。

イ・コージの望み（後書き）

同僚やら上司とかをだそうかと、そこでサラリーマンの愚痴を募集します
ザコ以上に男性向け小説になる気が

上司を選べないのがサラリーマン（前書き）

なんとこの作品が日別で7位になってました
いいんでしょうか？

上司を選べないのがサラリーマン

魔法研究所は研究開発部・商品作成部・販売部・総務部に分かれています。
私がいるのは研究開発部第２課。
第１課は自由研究をしており、私がいる２課では研究所に届いた依頼に対応しています。

「イ・コージちゃん、こないだのフェルトにクレームが来たからなんとかしてちょーだい」

私に嫌味にたっぷりに話しかけてきたのは２課の開発主任テガ・ラパクーリさん。
いやテガさん、フェルトの開発責任者になりたいって騒いだのは貴男じゃないですか？

「わかりました、届いたクレームを見せて下さい」

……

・フェルト布でこぼしたワインを拭いたら使えなくなたっぞ。新品と取り替えろ
・剣を磨いたら鋭くなりすぎて指を切っちゃったじゃないか
・銀のフォークを磨いたら大事なお皿に傷がついたんだ。ママに叱れたら責任を取ってくれよ

これはクレームなんでしょうか？
それとも笑いを取りたいんでしょうか？
そんな事よりテガ主任、開発責任者になったんだから、これ位の苦

情はなんとか宥めて下さい。

「嫌味ネズミが来てましたけど、何かあったんですかー？」

リアさん、確かにテガ主任は痩せていて出っ歯でネズミみたいな顔ですけども嫌味ネズミはまずいでしょ。私は眼鏡ブタとかデブ眼鏡とか言われてるんじゃないかと心配になりますよ。

「これです」

クレームをリアさんに手渡すと

「嫌味ネズミはお馬鹿貴族のお守りも出来ないんですかねー？」

どうして女の人って、相手がいないと好き放題に言えるんでしょうか？

聞いている私の胃がもちませんよ。

「作ったのは私ですから私が何とかしますよ」

実際に私が何とかするしかないですし。

通常業務がありますから今日も徹夜ですね…

ベットが早速役に立ちました。

そう喜んでおきましょう。

ｓｉｄｅ　リア

テガ・ラパクーリ３５才。

ラパークリ男爵の長男で、それなりの魔力はある男。男爵は一代爵位だから、ごり押しに近い形で研究所に就職したみたい。
出世の基本は他人の褌な嫌味ネズミが次に目を付けたのはイ・コージさん。
ヤ・ツーレ所長がイ・コージさんの実力を知っているから、良いような物のそれじゃなかったらリア特製のネズミ捕りを設置していたと思う。

「イ・コージさんおはようございます。お馬鹿対策はできましたかー？」

「ええ、ちょっと虚しい感じもしますけどね」

そう呟いたイ・コージさんの目の下にクマが見えました。
これは嫌味ネズミへの仕返しを考えなきゃ。

差し出されたフェルトを見てみたんだけども

「何も変わっていない感じがしますけど」

「変えたのは裏ですよ。ひっくり返してみて下さい」裏側には細かい注意書きが書かれていました。

・本品を本来の使用目的以外に使うと性能が著しく劣化するのでご注意下さい
・本品を使うと剣が鋭くなりますのでご注意下さい
・本品は装備品のみにご使用下さい

……イ・コージさんお疲れ様です

ｓｉｄｅ　イ・コージ

ホッとしたのも束の間、テガ主任がまたやってきたんです。
思わず主任の仕事の心配をしてしまいましたよ。

「イ・コージちゃん。今ヒマだよね、そうだよねー、僕今日行かなきゃいけない所があるからさー、これを頼むね」

テガ主任が研究室に置いていったのは宝石が散りばめられ、美しい装飾が施された立派な盾です。

感動するぐらいに見事な丸投げですね。

「主任、これは一体なんでしょうか？」

「それに軽量化・威圧・疲労回復の魔法を付与してちょーだい。材料は揃えておいたから明日までに頼むよ」

ああ、そう言えば誰かがテガ主任はレディスクラブに目当ての女性がいて通い詰めているって話をしていましたね。
既婚者で、その元気はある意味うらやましいです。

……

ざ、材料不足です。
軽量化に必要な魔石がないじゃないですか！
私に魔石を精製しろって言うんですか。
テガ主任が若い娘とお酒を飲んでいる時に私は実験器具とニラメッ

コ…
ちょっとだけ泣きたくなります。
そんな時です、研究室の扉が開きました。

「もうイ・コージさん嫌味ネズミの仕事に、そんな真面目に取り組む必要ないですよー。どうせご飯食べてないんですよね。サンドイッチを作ってきたから食べて下さいー」

「リアさん帰ったんじゃないですか？」

「事務にいる友達から聞いたんですよー。嫌味ネズミがイ・コージさんに自分の仕事を丸投げしてレディスクラブに行ったってー」

恐ろしきは女性の噂包囲網。

「やっぱりそうでしたか？まっ家に帰ってもする事がないですから」

「嫌味ネズミは今頃レディスクラブで鼻の下をのばしているんですよ。悔しくないんですか？」

だからって、リアさんが怒らなくても

「ちょっだけ悔しいですよ。でもその女性はテガ主任と談笑してるんじゃなく、テガ主任のお金と談笑しているんですから。それに気付かないテガ主任こそ哀れなんですから」

研究者は何時も事実を見なきゃいけません。
昔、痛い思いをした私だから言えるんです

「随分とお人好しなんですねー」

違いますよ、そう思わなきゃやってられないんです。

「それにリアさんの優しさがこもったサンドイッチの方がレディスクラブのお酒よりも何倍も価値がありますから」

「サンドイッチで、そこまで喜ばれるとは思っていませんでしたよー」

故郷に帰れない私が女性の手作り料理を食べれるのは奇跡に近いんですから

上司を選べないのがサラリーマン（後書き）

次はザコのシャルレーゼ女王とガーグのひいおじいさんの話を更新予定です
書きためができた時点で更新します

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある（前書き）

レディス・バーはキャバクラと思ってもらえたら

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある

ｓｉｄｅ　イ・コージ

「イ・コージちゃん、今日の夜ヒマだよねー」

テガ主任、貴方はいつも暇ですよね

「新しい依頼ですか？それなら…」

今は無理ですと、言い掛けたんですが

「依頼じゃないよ。こないだの盾のお礼にいい所に連れて行ってあげるから。じゃ後で」

テガ主任、連れて行きたい場所がバレバレです

リアさんがいる前で誘ってくれて非常にありがた迷惑ですよ

「イ・コージさんもレディス・バーに行くんですか？」

リアさん言葉の節々に棘が見えています。

「行きたくなくても連れて行かれるんでしょうね。テガ主任の魂胆が丸分かりだから断りたいんですけども」

「魂胆ですかー？」

「自分より格好悪い私を連れて行く事で自分を格好良く見せたいんでしょうね。後は専門的な質問をされて困ったんじゃないですか」

テガ主任は、一応魔法研究所の主任なんですから

ｓｉｄｅ　リア

イ・コージさんが嫌味ネズミの引き立て役？
冷静に見た目で判断しても人が良さそうに見えるイ・コージさんの勝ちだと思うんだけと。
話なんてしたら嫌味ネズミに勝ち目はなんてないと思う。
多分、嫌味ネズミの事だから見栄を張って自慢話しかしないと思うし。
そして愛想笑いを本気して１人悦にはいると。
イ・コージさんなら相手の話を聞いて終わりだと思うんだよねー。
男性としてどうかじゃなくお仕事として楽な相手はどっちかは一目瞭然。
それを分かっているイ・コージさんと嫌味ネズミじゃ勝負になる訳がないじゃない。
まぁ勝負しているのは嫌味ネズミだけで、イ・コージさんにはそんな気はサラサラない様だし。
もし、もしイ・コージさんもレディス・バーにはまったら…
なんかムカつく。

ｓｉｄｅ　イ・コージ

テガ主任、そのフッションはきついです。
貴男は体が細いんですから、ダブダフな服を着ると余計にみすぼらしく見えますって。
第一、その格好をしている若い子は前程見ませんし。

「イ・コージちゃん、あまりレディス・バーに来た事ないでしょ。
僕に任せておいて」

テガ主任、そんな活気に溢れた姿初めて見ましたよ。

「はぁ、よろしくお願いします。後明日も早いんで1時間ぐらいで
帰ってもいいでしょうか？」

ぶっちゃけ、定時出勤なんですけど

「イ・コージちゃん、そんなにノリが悪いと嫌われちゃうよ。でも
アフターの時には帰ってね」

テガ主任、今日は平日だからレディス・バーの皆さんも早く帰りた
いと思うんですけど

「わかりました。先ずご飯はどうしますか？」

「？何を言ってるの？直行するんだよ」

いやいや、まだ準備できてないから確実に嫌がられますって

「すいません、空酒ができないんで軽く食べていきましょう」

「仕方ないなー。そんなんだからイ・コージちゃんは太るんだよ。
そうだ！ピンクちゃんが言ってたパスタ屋さんに行こう」

おっさん2人でパスタですか？
それとピンクさんは絶対に本名じゃないですよ。

……

浮いてます。
周りは若い人ばかりで、私とテガ主任は確実に浮いています。
それと周りからの視線がとっても痛いんですけど。

その後、テガ主任は絶対に捨てられる運命となる花束を購入。
そして満面の笑顔でレディス・バーへ。
お店の名前はプリティ・キャット、確実に本性は怖い猫さんがいそうです。

「いらっしゃいませ。あっテガちゃんいらっしゃい。ピンク寂しかったー」

テガ主任、今の営業トークですからね、そんなに喜ばないで下さい。

しかしよく喋りますね。
会議の時も同じぐらい喋って欲しいんですけど。

「初めまして、アクアです。お客様初めてですよね」

そしてここに来るのも最後です

「あまり賑やかな場所は得意じゃないので、私は研究室の方が落ち着きますし」

「お客様も魔法研究所の方なんですか？それなら見てもらいたい物があるんですけども」

依頼だとお金が発生しますよ。

「アクアちゃん、イ・コージちゃんは僕の部下の中でも優秀な男だから任せたらいいよ。もちろん依頼料はタダだよねイ・コージちゃん」

つまり私にタダ働きしろと。

まぁ無言で飲んでるより何かしてた方が気が紛れますし

「これなんですけども。ペンダントに付与してある血流促進の魔法が効かないみたいで」

ペンダントで血流促進って肩こりでもするんですかね

「アクアちゃん胸が大きいから肩がこるんでしょ？」

テガ主任、セクハラ発言をするのは止めて下さい。

私も同じ人間に思われるじゃないですか。

……

ペンダントにはブラッディルビーがあしらわれており、その周りには魔法陣が施されていました。

「どこか明るくして大丈夫な部屋はありますか？この薄暗い中じゃ作業ができませんから」

私お客さんですよね。

作業をする場所は事務所ですか。

懐から簡易加工セット（拡大鏡・彫金タガネ・魔力テスター等）を

取り出して作業に取りかかろうとしたら

「あの私はどうしたら良いですか」

「お仕事に戻って良いですよ」

（魔力経路が欠けていますね。これなら直ぐに治せます）

ーーーーーーーーーーーー

「それでボーイさんにペンダントを渡して帰っちゃったんですかー？一口も飲まないで」

リアさん人の疲れた話を聞いて喜ばないで下さい。

「戻って来たらテガ主任がハッチャケまくっていて混じる気が失せたんですよ」

それを聞いて更に喜ぶリアさん。

テガ主任の新しいネタを聞けたから嬉しいんでしょうか。

その日の昼の事。またヤ・ツーレ所長に呼ばれたんです。

「イ・コージさん、今晩レディス・バーに付き合って下さい」

この時は、あんな後味の悪い依頼に繋がるなんて、想像もしていませんでしたね。

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある（後書き）

さすがにキャバ嬢の方やボーイさんは見てないか

でも上司や妙に気合いの入った知人と行って困った事がある人はいるかと

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？（前書き）

明日は休みって事でイ・コージも投稿
この小説は若い人が読んで楽しいんだろうか？
高校生や中学生の人（特に女子の方）はおじさんが主役って読む気は起きないかも
でもサラリーマンに読んでもらいたくて書いた小説だし良いとしましょう

ちなみに今日は法人の飲み会、まずは理事長にビールをつぎに行かなきゃ

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？

ｓｉｄｅ　イ・コージ

所長に連れて来られたのは昨日とは違うレディス・バーでした。
店の名前はセクシー・バタフライ。
きっとお金を持ち去っていく蝶がいるんでしょう。

「ツーレ様いらっしゃいませ」

「奴は来ているか？近くの席に頼む。それと少しの間は誰も来なくていいからな」

まさか所長は常連なんでしょうか？
最後の奴って誰なんですかね？

「イ・コージさんはあまりこういう店に来ないでしょ？まぁ私も接待の時しか来る気はありませんしね」

（上客の貴族や騎士への接待ですか。それと色仕掛けを使う時とかも使いそうですね）

「イ・コージさん、ルーンランドには慣れましたか？」

世間的な挨拶から何かを探るんでしょうか？

「ええお陰様で、助手のリアさんも良くしてくれますし」

「それなら安心です。この短期間で人気商品を開発してくれて感謝

をしていますよ」

誉められたからって油断してはいけません。
牽制を兼ねたジャブの後にガードを下げてくる、下手に飛び込めば
カウンターをもらいそうです

「私は開発をしただけですよ。後は制作部や販売部の力ですから」

そんな時です。
隣の席から若い男が大きな声で叫んだのは

「よっしゃあーぁ。ダンペリ入れちゃうよ」

「キャッー、さすがはクリス君。だーい好き」

大好きなのはダンペリで入ってくるキックバックなんでしょうけども

「若いのに随分とお金持ちの方もいるみたいですね」

「クリス・アレクサンドラ。アレクサンドラ子爵家の長男です。クリス様は少し前にファイニー伯爵家の令嬢マリアンヌ様との結婚が決まりました」

所長は私にだけ聞こえる様に呟きました。
いわゆる政略結婚てやつですか。

「それなら不味いんじゃないですか？こんな場所で大金を使っていちゃ」

「アレクサンドラ子爵からの依頼です。レディス・バーの女に、の

めり込んだクリスの目を覚まして欲しいとの事、イ・コージさん頼めますか？」

「とりあえず詳しい状況を教えて下さい。それによって創る物が変わりますので」

「流石はイ・コージさん、詳しい資料は明日届けます。それでどうします？女性を呼びましょうか」

今、色仕掛けにのったら断れなくなるじゃないですか

「いえ、ちょっと調べ物があるので研究室に戻ります」

イ・コージが帰った後にヤ・ツーレが満足げな笑みを浮かべて呟いた。

「さてイ・コージさんは今度はどんな物を創ってくれるんでしょうかね」

所長から届いた資料によるとクリスさんはかなりのお金をつぎ込んでいるみたいですね。

お目当ての女性は、お店ではアゲハと名乗っていますが本名はデボラ・ポー。

「おはようございまーす。イ・コージさん真剣な顔をして何を読んでるんですかー？」

「リアさんおはようございます。新しい依頼ですよ」

……

「それで、このデボラさんとクリスさんは恋仲なんですかー？」

「いえデボラさんには、きちんと彼氏がいるそうですよ。クリスさんの片思いを利用しているって感じでしょうね」

「婚約者があのマリアンヌさんなら、分からなくもないですけどねー」

確かマリアンヌさんって、伯爵家の令嬢ですよね

「リアさんお知り合いなんですか？」

「昔、同じ学校に通ってました。プライドが高くて相手の判断基準は家柄とか容姿が全てな方でしたよー」

クリスさんの見た目は私よりは格好いい程度です。

しかしそれなら、何で？

「それならマリアンヌさんは今回の婚約に納得していないのでは？」

「お金ですよ、お金。ファイニー伯爵家は代々の贅沢がたたって台所は火の車、一方アレクサンドラ家は領地で金脈が見つかってお金はありますからねー。後は名誉が欲しいって所じゃないんですかー？」

マリアンヌさんは贅沢がしたいから嫁ぐと、アレクサンドラ家は伯爵の血を入れる事で自家の格をあげたいって思惑ですか。

「でもクリスさんのご両親は、なんで何もいわないですかね？」

「言える訳ないじゃないですかー。金脈はクリスさんがダウジングで見つけたそうですよー」クリスさんにしてみれば金脈を見つけたばっかりに、お金目当ての気位が高いお嬢様と結婚をさせられそうなんですね。

それで夜の蝶に逃げた訳ですか。

（所長に2人が顔を合わせる日があるか聞いておきますか。それまでにアレを作っておかないといけませんね）

アレクサンドラ家邸宅

今日クリスさんの家に、マリアンヌさんが訪問するとの事。

私は所長にお願いをして2人が過ごす予定の庭園を見下ろせるテラスに潜んでいます。

（イ・コージさん、来ました。あれがマリアンヌさんです）

何故かリアさんも付いて来てくれました。

あの方がマリアンヌさんですか…令嬢は美少女しかいないというのは、庶民の幻想だった様ですね。

（それじゃ早速試してみますか）

（イ・コージさん、その指輪なんですかー？ついてる石は水晶ですかー？）

（正解です。純度の高いクリスタルに精神反応の魔法を付与してあります。指輪にはの欲求感知の魔法陣を彫りました。だから対象者に魔力を向けると）

ｓｉｄｅ　リア

イ・コージさんがそう言った瞬間に透明だった水晶が金色に光りました。

（マリアンヌさんは予想通り金色ですね。クリスさんは暗い赤紫ですか…）

（イ・コージさん１人で納得していないで私にも教えて下さいよー）

イ・コージさんの説明によると、この指輪は対象者の欲求や心理状態を色で表すみたい。

金色は見栄や金欲、明るい青は癒しで暗い青は拒絶、明るい赤は情熱で暗い赤は怨恨や怒りを表すんだって。

つまりマリアンヌさんはクリスさんをお金としか見てなくて、クリスさんがマリアンヌさんに感じてるのは拒絶と怒りになるらしい。

（凄いじゃないですか！またヒット商品の誕生ですね）

（こんな物を売ったらみんな人間不信になっちゃいますよ）

イ・コージさんは前に友人に頼まれて同じ物を作ったんだって。

その人は奥さんが浮気をしていると心配したみたいなんだけども、
浮気相手は自分の実の弟。
奥さんは自分には笑顔だけど無色（無関心）、弟には綺麗なピンク
（恋心）の反応が出たみたい。

結果、イ・コージさんの友人は人間不信になり行方不明に。
行方不明になってから半年後には奥さんと弟さんが結婚していたん
だって。
確かに人間不信になる指輪じゃ売れませんよねー。

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？（後書き）

今悩んでる点
複数ヒロイン＆イ・コージの暗黒面（前歴が前歴だけに）を取り入れるかどうかです。

感想お待ちしております

イ・コージの過去と闇（前書き）

昨日頂いた感想を元に話の進め方を決めました

イ・コージの過去と闇

ｓｉｄｅ　イ・コージ

「所長、これが今回のマジックアイティムになります。実験の結果マリアンヌさんは金欲、クリスさんは拒絶と怒りの感情を表しました。これをクリスさんに貸せばレディス・バーには通わなくなると思います」

「貸すんですか？」

「周りの人間が全てが自分に良い感情を持っているなんてありえませんからね。下手したら人間恐怖症になりかねません。レディス・バーに通わなくなっても、それじゃ意味がないですから」

自分が作った物で人が不幸になるのは、あまり愉快じゃないですし

「わかりました。クリスさんには私から新アイティムの使用モニターとして協力依頼の形で渡します」

ｓｉｄｅ　クリス

金・金・金・みんな僕の事を金づるとしか見てないんだ。
アゲハちゃんもマリアンヌさんも執事もメイドも……
金脈をなんて見つけなきゃ良かった。
こんな指輪の使用モニターの協力なんてしなきゃ良かった。
僕は金しか価値がない人間だなんて知りたくもなかった……

ｓｉｄｅ　イ・コージ

今日も所長に呼ばれました。
まさかあの指輪じゃ効果がなかったんでしょうか。

「イ・コージ君、結果だけ言うとクリスさんはレディス・バー通いを止めた。しかし…」

あー、所長の顔が厳しいですね。
予想はしていたんですけども

「クリスさんは、人間不信になりましたか。流石にアレクンサンドラ子爵から苦情が来ていますよね」

減点物ですね。
下手したら…まぁ元の木阿弥と思いましょう。

「いえ、むしろ感謝されました。マリアンヌさんも婚約を解消したみたいですよ」

それじゃクリスさんが人間不信になっても仕方ないですよね

「親御さんも同じ穴のムジナですか。わかりました、最後まで関わるとします」

アレクサンドラ子爵にとって大切なのは家名な様です。
指輪を作った責任、そして同じ人間不信だった私にはクリスさんと話す責任がありますね。

ｓｉｄｅ　クリス

部屋から出るのが怖い
誰かに会うのが怖い
あれから僕は部屋から出る事ができないでいた。
そんなある日、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「クリス様、失礼します」

そう言って部屋に入ってきたのは2人の男性。
1人はヤ・ツーレさん、もう1人は痩せたヤ・ツーレと対照的に太った中年男性。

「クリス様指輪のモニター協力ありがとうございます。開発者のイ・コージ共々こうしてお礼にをしたくてお邪魔させてもらいました」

ヤ・ツーレさんもイ・コージさんも穏やかな笑顔を浮かべている。

（あんな表情をしても、腹の中じゃ僕の事を金づるってしか見てないんだ）

でも指輪は金色じゃなく澄んだ青色をしていた…

「作った本人が言うのもなんですが、その指輪はあくまで対象者の一番強い感情を表すだけですから決して万能ではないんですよ。それに人の気持ちなんて結構変わるものですしね」

「慰めですか？」

確か青は癒しの色、癒しと言えば聞こえはいいけどもそれは哀れみとも捉える事ができる。

「いえいえ、今の貴方を見ていると他人に思えなくて。おじさんの老婆心だと思って下さい」

イ・コージさんは、どこか遠くを見ながら話始めたんです。

「昔ある国に1人の少年がいました。その子は魔術の才能があり、その才能を磨く為に必死に努力をしたんですよ。友達とも遊ばず恋もしないで来る日も来る日も魔術を磨いたんです。努力は人を裏切らないと先生に言われた言葉を信じてね」

イ・コージさんは深いため息をついた後に、また話始めました。

「少年は夢を叶えて自分の国の魔法研究所に勤める事ができたんです。少年は魔術の研究に没頭し気づけばおじさんになっていました。でもある日おじさんは全てを失いました……確かに努力は裏切りませんでしたが人に裏切られちゃったんですよ」

「裏切られたって、何があったんですか？」

多分そのおじさんはイ・コージさん…

「上司に研究成果を奪われたんですよ。しかも歪な方に変えられてね…他人を信用できなくなったおじさんは研究成果を持ち出して研究所から逃げたんです。
研究成果が欲しい上司は追っ手を差し向けてきました。殺してでも

奪えって命令をしてね」

イ・コージさんの顔が闇に包まれました…

「自衛とは言え人を殺めたおじさんは故郷にも人の群れにも戻れなくなって孤独となり、終いには冒険者に討伐をされて地下牢に入れらてしまったんですよ。でもね貴方は裏切られても誰も傷つけなかった、だから大丈夫です。そのおじさんも違う国で頑張っています。だから貴方も歩きだして下さい」

ｓｉｄｅ　イ・コージ

「クリスさん大丈夫ですかね…」

「後は本人次第でしょう。それよりも困った人が着いて来ていますね。あそこの路地に入ってお話を聞きますよ」

やれやれ、所長は面倒事は早めに潰すタイプなんでしょう

路地に入って人気が途絶えた時です

「レイジー、アイツだよ。あの親父が来てからカモも来なくなったんだよ」

あれはクリスさんがはまっていたアゲハとか言うレディス・バーの人

隣のレイジーって言う人が彼氏、所謂ヒモらしいです

「おっさん達が余計な事したせいでよー。デボラが稼げなくなちゃったんだぜ。責任をとって金をよこしな」

「お金なら自分で働いて稼いで下さい。貴方みたいなお子様なら親御さんからお小遣いをもらうのが一番でしょうけども」

「あぁん！ガキ扱いしてんじゃねーよ。俺はキレたらやばいんだぜ、素直に金をよこしな」

貴方の言動がお子様そのものなんですけどね

「所長どうしますか？」

私は立場上、公的機関とは関われないんですから

「後始末は私がしますのでイ・コージさんの力を見せて下さい」

「おっさん俺は人を殺した事があるんだぜ！殺されたくなかったら素直に言う事を聞きな」

ナイフを抜きましたか……

「嘘ですね。人を殺めた人間はそれを手柄みたいに吹聴しませんよ。それに貴方には人を殺した暗さがありません」

イ・コージの顔が暗い闇に包まれる。

目に至っては深い洞穴を思わせる無限の闇を連想させる程に冷たく暗い物となっていた。

「お望み通り、私は貴方を1人の大人として扱います。だからきちんと責任をとってもらいますよ」

ｓｉｄｅ　ヤ・ツーレ

イ・コージさんは袖を捲り上げましたね

（あれはブレスットがですか。埋め込んであるのは触媒の魔石ですね）

その中にある黄色い魔石にイ・コージさんが、触れるとレイジーを黄色いガスがを包み込ました。

（あれが報告書にあったイ・コージさんの気体魔法ですか）

「えっ！レイジー何したの？」

レイジーは床に倒れ込み涎を垂らして呻き声をあげています。あれは恐らく

「殺す価値もなさそうなので、麻痺性の気体魔法で大人しくなってもらいました」

イ・コージさんの声には一切の感情がありません。

「なんで、こんな酷い事をするの？レイジーは、まだ何もしてないじゃない」

「貴女は馬鹿ですか。何かされたら困るから麻痺させたんですよ？ご希望なら腐食魔法で顔を潰してあげますよ。もちろん貴女も一緒

にね」

女性の悲痛な叫び声に反比例するかの様にイ・コージさんの声は冷たくなっていきます。

「やめてっ。謝るしお金も払うし何でもするから」

「自惚れないで下さい。私は貴女に価値を一切感じていません。貴方達は大人なんでしょう？社会のルールから逸脱しておいて被害者面をするもんじゃありません。後は私の後ろにいる方が貴方達に処断を下してくれますよ」

（流石は元死刑囚ですね。普段の温厚な顔の下には酷薄な獣が眠っていましたか。これなら違うお仕事も頼めるでしょう）

女性が私を哀願するような目で見てきています。

この2人の使い道ですか……

「貴方達2人には鉱山で働いてもらいます。肉体労働をしてお金の大切さを学んで下さい」

イ・コージの過去と闇（後書き）

感想お待ちしております

おじさんは若いアイドルの話をされると困る（前書き）

ちょっと作者の実体験が元になってます

おじさんは若いアイドルの話をされると困る

ｓｉｄｅ　イ・コージ

今日も呼ばれました所長室。
所長絡みの依頼はハードルが高いのが多いから正直勘弁して欲しいんですけどね。

「失礼しますイ・コージですが」

「良く来てくれたね。まぁ立ち話もなんだから掛けて下さい」

所長は穏やかな笑顔で出迎えくれました。
でも油断しちゃいけません。
所長は同じ笑顔でレイジーさんとデボラさんを山奥の鉱山に送ったんですから、しかもアレクサンドラ家所有の鉱山にです。
クリスさんは穏やかな性格で鉱山で働く人に慕われていたみたいですから、どんな事になっているか想像もしたくないですね。

「イ・コージさん、前に作ったゴブリンバイバイを人に応用できませんか？開発期間はお城でのダンスパーティーまで」

ほら来た、ダンスパーティーまで2週間しかないのに笑顔で無茶振りをするんですから。

「内容によります。ゴブリンバイバイを応用した物は使い方によっては大変危険ですから」

「相変わらず慎重ですね。ところでイ・コージさんはマジックガー

ルズはご存じですか？」

「いえ全くわかりませんけど」

「今ルーンランドで大人気のグループアイドルですよ。ダンスパーティではマジックガールズのコンサートもあるんですけども、彼女達のファンはちょっと暴走気味でしてね。ステージにあがろうとしたりするんです。流石にお城で、それはまずいですから」

傭兵隊や魔術師隊の皆様がガードをするとファンが萎縮するから無理でしょうね

「それで人間用の結界が必要な訳ですか。でもお城にくる人なら自重するんじゃないですか」

いくらお花畑騎士団の方でも王様の御前で暴走はしないでしょ

「今回のダンスパーティーは年に1回だけ一般市民がお城に入れる日なんですよ。楽しみにしている市民が多いから中止にはできないんです」

ちなみに入場条件は無腰である事だそうです。

「ファンがステージに近づかなければいいんですよね」

しかもコンサートの邪魔をしない様にですよね

「それともう1つクリスさんが、こないだの指輪を貸してほしいそうです」

おじさんの気持ちが伝わらなかったんですか

「それは何か訳があるんですか？」

「今回のダンスパーティーは女性が男性をダンスに誘うんですよ。市民の女性が貴族を誘って結婚したなんて話もありますから」

なんでしょう、そのモテない男性への嫌がらせみたいなパーティーは私は普通のパーティーでもあぶれた男性だけで飲んでるんですよ

「つまり婚約を解消したクリスさんにお誘いが集中するって事ですか。殆どは財産目当てだからフルイにかけたいって事ですか」

願わくは純粋にクリスさんを慕う女性に来て欲しいですよね

「ええ、婚約解消の話は既に町中に広がっていますから。それに1度成立したカップルはダンスパーティーが終わるまで解消できません」

お誘いが来ない私には関係ない情報ですよね。
それにダンスパーティーには出席しませんし。
だってデュクセン関係の人が来ていたらマズいじゃないですか。

「分かりました。後から指輪を持ってきます」

今の私にできる事は誰かが幸せになる為のお手伝いですしね。

ーーーーーーーーーーー

所長室から帰る廊下でテガ主任に会っちゃいました。

「イ・コージちゃん。見て見て、ダンスパーティー用に新しいスーツを作ったんだ」

主任、既婚者がその気合いはまずいんじゃないですか

「はあ、ダンスパーティーに奥様はいらっしゃらないんですか」

「……当然うちの奥さんも来るよ…」

あっ主任のテンションがダウンしました。

「お仲がよろしい様で羨ましいですよ」

「仲が良い？ご飯も作ってくれないのに……僕の目当てはマジックガールズだよっ！」

そりゃアイドルに夢中の旦那にはご飯は作りたくないかと

「マジックガールズってそんなに人気があるんですか？」

流石に私の年になるとアイドルに興味はないですし

「……人気？なに当たり前の事を言ってくれちゃっているの？初期メンバーからのファンの僕の前でそれを言うかい？いい、分かった。テガ主任のマジックガールズ講座を開始してあげる」

……

主任の魂の叫びは約1時間続きました。
私の頭に残った情報は、今のマジックガールズは3期メンバーで、
猿人族アリスさんとキャロルさん
エルフのフローラさん
犬人族のチェルシーさん
猫人族ソニアさんの
5人構成だと言う事だけです。
主任は歌や5人の誕生日や趣味・特技を熱弁を振るって教えてくれたんですけどね。
でも収穫はありましたよ、主任の熱狂振りはマジックアイティムを作る際の参考になりますから。

「イ・コージさんお帰りなさい。随分と遅かったですねー」
「そこでテガ主任に捕まりまして、1時間程マジックガールズの講習会を聞かされましたよ」
「…マジックガールズですか。イ・コージさんも好きなんですか？」
大変です、リアさんが誤解をしているみたいです。
「所長に言われるまで知りませんでしたよ。まぁ主任の熱狂振りは今回の依頼の参考にさせてもらいますよ」
「確かにマジックガールズのファンは怖いぐらいに熱狂的ですからねー…」

「今回の依頼はそのファンの方々を抑える物です。私は2週間の間は残業をしていきます」

「イ・コージさん忙しい所をすいませんが私からの依頼も受けてくれませんか」

リアさん私に2週間お泊まりをしろと？

おじさんは若いアイドルの話をされると困る（後書き）

マジックガールズで設定があるのは1人だけです
今回は叩かれる内容だったかも

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5132y/

魔法研究所 中年所員イ・コージの日々　※ザコ≧勇者 番外編

2011年11月22日00時59分発行